

2020年2月

聖句随想・折々の言（ことば）

「 〈ラハブ〉 との出会いを喜ぼう 」

牧師 森 言一郎

ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシテ
ィムからひそかに送り出し、「行って、
エリコとその周辺を探れ」と命じた。
二人は行って、ラハブという遊女の家
に入り、そこに泊まった。

（ヨシュア記 2章1節）

2019年のクリスマス前。私はイエス・キリストの系図に登場する女性たちの存在から、新たに学び直してみよう、という思いが与えられました。中でも丁寧に読み直し、学び直して本当によかったなと感じたのが、「ラハブという遊女」が登場するヨシュア記でした。ここでもう一度、ラハブとその周辺の事柄から示されていることについて、ご一緒に考えてみたいと思います。

*

ヨ シュア記の 1 章～ 2 章には、出エジプトの民を 40 年にわたって率いて来たモーセが、約束の地を目の前にして召されたのち、その後継者として「ヌンの子ヨシュア」が立てられ、大事な一步を踏み出す様子が描かれています。

詳細は省かざるを得ませんが、ヨシュアという人は聖書に最初に登場した頃は「若者」であり、「従者」としてモーセの側に居た人でした。そのヨシュアが、およそ 39 年前にモーセから送り出されて自分自身も斥候として足を踏み入れたことのある約束の地カナンに、二人の者をスパイとして送り込む場面が描かれています。

*

➤ の辺り、何だか映画を観ているかのような光景が繰り広げられていき、旧約聖書を読む楽しみが格段に大きくなります。まるで活

劇を観ているかのような場面が展開していくのです。念のために申し上げるならば、出エジプトの途上において神さまの御心に叶わない行動をとった成人男子は、モーセを含め、そのほとんど全てが死んでいきました。

ただ、ヨシュアとカレブという二人だけが、エジプトから脱出した者の中で生き残っていた男たちだったのです。

*

—— 人の斥候が足を踏み入れた地は「エリ
—— コ」という町でした。当時のエリコは、様々な聖書外の文献や遺跡などから、古代オリエントの社会でも相当に高度な文明が発達し、重要な交易路だったと推測される古代都市です。小さいながらも王国が形成されていました。

当 然、王制が敷かれ、既に階級社会が存在していたようです。頂点に王が存在し、その下に貴族がいました。権力者達に従順な人々が周

りを取り囲み、さらにその外側には労働者がいますし、庶民が暮らしていたのです。さらにその下には、人の数にも入らないような階層がありました。

二人のスパイは、エリコを囲む頑強な城壁の一部を改築して宿屋を営んでいたラハブの宿に身を寄せます。ラハブは見慣れぬ二人がヨルダン川越しにたどり着いていたイスラエル人であることを直感したことでしょう。

*

彼女は情報が行き交う場でもある宿屋を営んでいたが故に、イスラエルの民についての噂をしばしば聞いていました。

エジプト王ファラオの率いる軍勢を葦の海で蹴散らした民であり、戦争に勝ち続けている民であるということを、女主人であるラハブは承知していたのです。そして、ラハブはイスラエル人を守っている「神が存在する」という畏れと確信を抱い

ていた人でした。

*

聖書とその行間から読み解いていくなれば、
ラハブは身を持ち崩して遊女として生きていたのではないことは明らかです。

年老いた両親をはじめ、兄も姉も弟も妹も居た人でした。彼女は何らかの事情を抱えており、家族の面倒を見る立場にあって、細腕で養わなければならない状況の中、日々を必死に生きていた人だと思われれます。神さまは、そんなラハブを「乳と蜜の流れる地カナン」に神の民を導き入れられる際の鍵を握る人物として用いられたのです。

*

のちに、マタイによる福音書 1 章の「イエス・キリストの系図」にラハブの名が記録されていくこととなります。すなわちその事實は、彼女がイスラエルの民の一員となっていくことを

意味します。

新約聖書のヘブライ人への手紙 11 章 31 節には「信仰によって、娼婦ラハブは、様子を探りに来た者たちを穏やかに迎え入れた」と記されるようになるのです。

ラハブは二人の斥候がエリコの国家当局の秘密警察の追っ手に捕らわれそうになったとき、見事に機転を利かしてかくまい、助けました。私たちは「遊女」と聞くだけで「とんでもない女に違いない」と決めつけてしまうところがありますが、神さまの物差しは全く別のところにあるのです。

*

大胆に推測するならば、エリコという町に生きていることの息苦しさや、その社会の理不尽で不自由なことに憤りを抱いていたラハブという女性は、イスラエルの民をエジプトからエリコの対岸まで導いて来た神に一縷の望みを掛け、期待を寄せていた可能性があります。

そして実際に、イスラエルの民がヨルダン川を渡り、要塞都市エリコの城壁を打ち破って入って来る折には、自分の一家を何とか助けてほしい、と願うのです。

ラハブは二人の斥候に対して「アーメンを約束して下さい」と求めました。「真実の誓い」を求めるこの行動は、結果として、神さまへの祈りであり願いであった、と私は思っています。

*

➤ のとき、スパイの二人を通じて示された
☪ のは「真っ赤なひもを窓辺に結んでいてくれ。言う通りにしてくれたならばそれが目に入る。我々は必ずあなたたち一家を守るぞ」という約束でした。

「ひも」を意味する「ティクバ」という語には、「望み・希望・期待・きずな」の意味があるのは偶然ではありません。

神さまは、ラハブのように、世にあって軽んじられ、小さくされて生きている者を用いて「約束の地」が意味する「神の国」の扉を開かれたのです。

*

イ スラエルの民がエジプト脱出の折に、鴨居と柱に小羊の血を塗るように神さまから示され、その通りに血を塗ると、災いが過ぎ越していったことと一致する出来事がエリコでも起こるのです。

その二つの過ぎ越しの出来事は、イエスさまが神の小羊として、ゴルゴタの丘の十字架の上で屠られ、その血が流されたこととも見事なまでに一致します。

ここには、イエスさまを救い主として信ずる信仰に立って生きていく為の扉があります。そしてここには、今を生きる私たちのための、神の国の救いのみ業を見いだすことが出来るのです。end